

Kaiko

KAIKO TAKESHI MEMORIAL SOCIETY

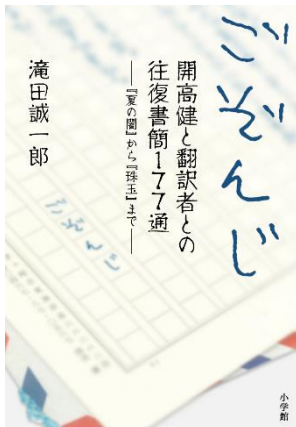
開高健記念会通信 09

滝田誠一郎さんが 往復書簡読み解く

『長靴を履いた開高健』などの著書があるノンフィクション作家、滝田誠一郎さんの新著『ごぞんじ 開高健と翻訳者との往復書簡17通』（小学館）が3月26日、発売されました。『夏の闇』など多くの開高作品の英訳を担った翻訳家、瀬川淑子（セシリア・セガワ・シグル）氏が開高と交わした往復書簡を読み解き、「人間・開高健」の声をすくい取っています。

■「日本文学の為に」

瀬川氏が開高と初めてかわりをもったのは1972年。米出版大手クノッフ社の「リーダー」として日本の現代文学を読み、英訳



に値するか判断する仕事をして

たときでした。クノッフ社から送

られてきた開高の長編『夏の闇』

を「この小説は売れない事請合

が、日本文学の為に翻訳すべきだ

と評価。自身が翻訳することにな

りました。しかし、開高の研ぎ澄

まされた日本語をニュアンスも含

めて翻訳するのは容易ではなく、

同年9月に21項目にわたる質問

を送りました。これが、開高が死

去する直前まで17年間続くこと

になる往復書簡の始まりでした。

■女の気持ちを推測

「ひっぱたいてやろうと思って

いるうちにふとうなずいちゃった

りして」という「女」の気持ちを

確認する質問に、開高は「女はか

らかわれてくやしくなっぴひっ

たいてやりたくなるが、内心では

つい事実だと認めるよりほかない



たきた・せいいちろう

1955年生まれ。ノンフィクション作家。『開高健電子全集』（小学館）の企画・編集協力にも携わった

気持ちにもなる、ということ。女が年とって心が弱ってきたのでしようか」と答えています。

滝田さんはこのやりとりについて「自らが創作した小説の中の言葉であるのに、女の言葉の真意、言葉の裏にある心情を開高が推測しながら回答している点が非常に興味深い」「『夏の闇』が開高の完全な創作ではなく、モデルがいたこと、モデルが発した言葉をそのままなぞっている部分が少なからずあるということなのだろう」と分析しています。

■素の文章

「ごぞんじ」は、開高が署名代わりによく使った言葉。瀬川氏宛ての手紙にも「あなたさまからあたたかい泡のようないい手紙を頂かなくなっぴひっくになり、これまたさびしいのである。たまには東風が吹いたら思い出して下さいな。ごぞんじ」などと記していました。滝田さんは開高の書簡について「作家・開高健ではなく、人間・開高健が書いた素の文章とでもいうべきか」と指摘しています。

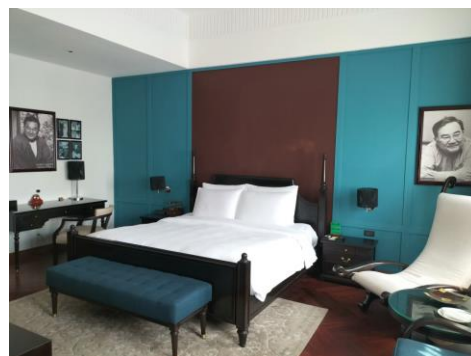
ベトナムに開高の足跡 藤森理事がリポート

開高健記念会の藤森益弘理事はベトナム戦争から50年となるホーチミン市(旧サイゴン)を訪ね、開高健の足跡をたどりました。そのリポートは以下の通りです。

◇

今年2月に3泊5日でベトナムに行ったが、その折に宿泊したホテルが、ホーチミン市内のメイン通りであるドンコイ通りがサイゴン川に突き当たる角にある「マジエスティック・サイゴン」だった。

このホテルは、1925年創業の格調の高さとエレガントな趣が漂うコロンアル様式の老舗であり、最上階のバーからのサイゴン川の夜景の眺望の素晴らしさでも有名だ。このホテルに今から約60年前の1964年11月、朝日新聞社の臨時特派員として34歳の開高健がベトナム戦争の取材に向き、翌年2月に帰国後、書き上げたのが『ベトナム戦記』であり、その



マジエスティック・サイゴン 103号室の現在

折に拠点として寝泊まりしていた部屋(103号室)が今は記念の特別室になっている。

宿泊した翌日、ホテルのスタッフに頼んでその部屋に案内してもらった。部屋の扉横の廊下の壁には、横長の小さな金属プレートが貼られていて、開高さんがこの部屋に寝泊まりしていたことが書かれていた。部屋の壁には、開高さんやご家族のスナップ写真が架かっていたが、『ベトナム戦記』の本に掲載されていた、開高さんが疲れ果ててベッドで眠っている姿を撮った写真の薄暗い煩雑な室内の

様相とは余りにもかけ離れた、真新しい白壁と大きなガラス窓に囲まれた清楚な広い部屋になっていた。当時の雰囲気を感じさせるもの何が残っていないその変貌ぶりに、正直期待外れの感を拭えなかった。

市内にあるベトナム戦争当時の足跡を残す建造物や遺跡や記念碑なども見て回った。その中で、より直接にベトナム戦争の歴史を綴る記念館が「ベトナム戦争証跡博物館」だった。館内には、小スペースながら「日本コーナー」も設けられていて、その中で一番大きな写真は、1967年10月に起こった羽田闘争で死亡した当時18歳の、私と同大学・同学年の山崎博昭の顔写真だった。なぜここに、彼がこんな取り上げられ方をしていいのか、私は複雑な思いにさせられるながら、しばらく彼の顔に見入っていた。と言うのも、彼の死は私の青春時代に大きな衝撃を与え、その死がきっかけで、私は学生運動に引き込まれ、ベトナム戦争にも強い関心を持ち始め、『ベト

ナム戦記』を読み、それ以外の開高作品も読み漁るようになった。その数年後、開高さんたちが設立した広告制作会社に就職することになるとは思いも寄らなかった。

その後、数十年にわたっての開高さんとの交流を通して様々な薫陶を受け、とりわけ亡くなる前の数年間、開高さんが出演したテレビCMのプロデューサーとして世界各地にも同行していた私が、若き開高さんが寝泊まりし、取材に駆け回り、九死に一生を得て、素晴らしいルポルタージュを書き遺したベトナムの地を60年後に訪れ、しかも同じホテルに宿泊出来たのも、それらの薄からぬ縁のようなものがなしてくれたのではと、少し残念な思いもさせられたが、改めて開高さんへの感謝の思いに浸らされた忘れ難い旅行になった。



ふじもり・ますひろ

1947年生まれ。広告制作会社サン・アドでCM制作に携わった。著書に『春の砦』など。開高健記念会理事。

有志による「朝露読書会」 オンラインで開催

開高健記念会の実行委員ら有志7人が2月2日、開高作品を語り合う初めての「朝露読書会」をオンラインで開きました。ベトナム戦争をモチーフにした開高健の長編小説『輝ける闇』について1時間あまり、互いの意見を交わしました。4月6日には2回目を行いました。『夏の闇』を取り上げました。

実行委員の間から「開高作品を改めてきちんと読みたい」という声があがり、開高ファンの知人らを含めて参加を呼びかけました。一番参加しやすい時間帯として日曜朝の開催となったことから、開高の名言「朝露の一滴にも天と地が映っている」にちなんで会の名前を決めました。

『輝ける闇』では、好きな文章として「森は静かだった」「私は狭い狭い薄明の地帯に佇む視姦者だ」「見ることはその物になることだ。私が荒地である。私が私を見る」などが挙げられました。作品全体

をみたとき、「光と闇のコントラストが効いている」という鋭い指摘も出ました。

『夏の闇』では映像化した場合のキャスティング案として、「私」に松坂桃李、山田孝之、松田翔太、「女」に戸田恵梨香、宮崎あおい、尾野真千子らを推す意見が寄せられました。

開高エッセイ、アンソロジー『ふうふう、ラーメン』に収録

2月6日に発売されたアンソロジー『ふうふう、ラーメン』（河出文庫）に、開高健のエッセイ「ラーメンワンタンシューマイヤーイ」が収録されました。

麺好き、中華好きの開高はうまいラーメンやワンタンを求めて食べ歩きますが、なかなか気に入りません。シューマイでは少数ながら合格点の店を見つけたましたが、客が殺到して味が落ちてしまうにちがいないと店名は紹介せず。「恋とおなじだ。御自分で見つけて下さい」と締めています。

他の筆者は椎名誠、角田光代、丸谷才一、沢木耕太郎など。税込み935円。

コレクション解説⑤

〈海外翻訳本〉

開高健の作品は多くの外国語に翻訳されています。蔵書には、署名入りも何冊が含まれます。

フランス語版『日本三文オペラ』には「Avec le plus grand plaisir Kaiko」と識語・署名が入っています。英語版『輝ける闇』は「Cecilia



Segawa Siegle 瀬川淑子」と翻訳者の署名入り。「To Mr. Imami with my best wishes Kaiko」
「Cecilia Segawa Siegle」ご著者と翻訳者の署名がある英語版『夏の闇』は、開高の署名が入った状態で古書店にあるのを見つけ、その後、翻訳者の瀬川さんに署名を頂いたものです。

ドイツ語版『日本三文オペラ』（1967年発行）と、同じくドイツ語訳新装版『日本三文オペラ』『夏の闇』もあります。モンゴル語版『裸の王様他』は1999年の発行。監訳を担当したのは開高とも親交のあった鯉渕信一先生（元・亜細亜大学長）です。台湾で発行された中国語版『國王的新衣』は『裸の王様』でしょうか。

このほか、フランス語版『流亡記』、ロシア語版『巨人と玩具・パニック・裸の王様』、ハンガリー語版『日本三文オペラ』など。英語版『五千人の失踪者』は高橋舜さんの写真が1葉付いていました。

（開高健記念会実行委員・伊佐山秀人）

〈お知らせ〉

◆次期企画展はベトナム戦争

開高健記念館で6月7日(土)～9月28日(日)に開催する次期企画展は「歩く影たち(仮題)」を予定しています。今年が1975年のベトナム戦争終結から50周年に当たることから、開高が朝日新聞のベトナム特派員(1964～65年)だった時に「週刊朝日」で担当編集者を務めた永山義高・当会理事長が先頭に立ち、企画展示に取り組みます。

開高はすでに代表作『輝ける闇』『夏の闇』を発表していて、戦争終結時に「さらば、ヴェトナム」と週刊朝日に寄稿しましたが、結局はベトナムと決別しきれませんでした。1979年刊行の短編集『歩く影たち』に収録された「兵士の報酬」「フロリダに帰る」「岸辺の祭り」「飽満の種子」「貝塚をつくる」「戦場の博物誌」などを開高が執筆した際の、永山のみが知るエピソードも紹介し「かねてからこの一冊はなんとかして作っ

てみたい本だった」と同書の後記に記した開高の思いを解き明かします。お楽しみに。

現在開催中の企画展「開高健手書き原稿の宇宙」は5月6日(祝)まで。終了後は次期企画展が始まるまで休館となります。ご注意ください。

◆文学フリマ東京に初出展

5月11日(日)に国際展示場「東京ビックサイト」(東京・有明)で開催される大規模書籍販売イベント「文学フリマ東京」に、「開高健の本棚」というブースを初めて出展することになりました。開高健記念会実行委員と有志メンバーが運営します。

図録『開高健の世界』や『頁の背後(全)』など、一般書店では手に入らない当会発行の書籍のほか、オリジナルの文房具や冊子など今回のために作成したグッズを販売する予定です。購入者特典も用意しています。

4月下旬ごろより当会ホームページやSNSで告知しますのでご

確認ください。年々来場者が増え、大きな注目を集めている大人気イベントです。皆様のお越しをお待ちしています。

◆ムック第2弾出版へ

開高健と、開高が愛したスウェーデンの釣り具「ABU」を特集したムック『Old Tackle Anglers(オールドタックルアングラーズ)』が5月下旬、つり人社から出版される予定です。

昨年出版されたムックに続く第2弾。開高は昭和40年代後半にスズキを釣りに山形・酒田市を訪れ『私の釣魚大全』にそのようすが記されていますが、現地で世話になった地元・富山釣具店との往復書簡を初公開。開高健記念館収蔵のルアー解説も掲載しています。このほか同時代のルアーフィッシング・シーンをけん引した各記事、オールドタックルで楽しむ令和の実釣記事など、温故知新を凝縮した一冊です。

予定価格は2640円(税込み)。詳細は5月中旬以降、つり人社ホ

ームページで確認できます。

〈編集後記〉サイゴンの陥落でベトナム戦争が終結したのは1975年4月30日のことでした。日本国内にも大きな影響を及ぼした戦争から50年。平和がいつまでも続くものではないという不安が高まる中、開高作品を読み返す意味は大きくなっています。(中)

「開高健記念会通信」第9号

(2025年4月20日発行)

- 発行者 開高健記念会
- 編集部 森啓次郎、中谷和義
- 発行所 〒167-0021 東京都杉並区井草 4-8-14
公益財団法人開高健記念会事務局
- ホームページ <https://www.kaiko.jp/>
- フェイスブック facebook.com/kaikotakeshi/

